

英語教育についての私感

今連休は、大学院ゼミのため二晩夜行バス弾丸上京、残務整理等ばたばたしていて、この文章を書くことが遅れてしまった。いつものことながら、東京は電車内、飲み屋、公共施設内、いたるところに外国人がいて英語が聞こえてくる。日本語を母語とする日本に住んでいる人も、自然に会話している姿が見いすることができる。私は、早朝に夜行バスが関東平野へ出るところから、AFNラジオを聞くことを楽しみにしている。

さて、最近、英語教育についての話題が多い。小学校高学年の英語教科化、中学校の英語科は英語で進めることを基本とするなどなど。

これからの子供たちは、身近に英語があり、学習ツールやチャンスがあり、自然に話すことができるようになるだろう。これらを加速度的に進められるかどうかは、大人がどれだけ英語に興味を持ち、英語を学んだり使ったりする雰囲気や、子供たちに見せることができるかに係ってくると感じている。教育をつかさどっているものが、「いやー英語は苦手だね」ではいけないと思う。へたくそ、間違ってもいいから、しゃべろうとする姿勢を見せることや英語を学ぶことが必要と考える。

話は少々変わるが、私が記憶している歴代首相の中で、英語の使い手として印象あるのは、中曽根首相と宮沢首相である。

二人とも東京大学卒なので秀才である。

しかし、中曽根首相は、(本人談) 英語が苦手で、外交上必要のため、風呂場にテープレコーダーを持ち込んで練習していたらしい。「ロンヤス外交」はそのような努力の結晶だったのかもしれない。

また、宮沢首相は、毎日必ず英字新聞を読んでいたようだ。理由は、「英語を使う者の考えは、英語を読まないとわからない」ということである。ニュアンスや視点がちがうらしい。確かに、英字新聞やウィークリーを見ると、記事の嗜好や表現が日本文とちがっていて面白い。

最近の内閣も、積極的に英語を使ってアナウンスしていることは評価できる。しかし、コミュニケーションとなるとさらなる努力は必要であろう。

まとめると、英語教育の目的が達成するかどうかは、子供たちと一部の教員に押しつけるのではなく、多くの国民が英語に関心を持つことであると思う。流暢に話す必要は無いが、家の身近なところに国語辞典とともに英和(和英)辞典があり、自然と会話の中で英語が話題になるような環境をつくり始めることが大切だと思う。繰り返すが、英語教育が効果を発揮するかどうかは、一人ひとりの大人に関わってくると思う。

最後に、間違っただけでほしくないのは、「英語だけできるが何もない」人間の育成ではない。母語を大切に、教養ある人間づくりが必要なことは言うまでも無い。